



せり出す異様と抛り所
2022
油彩、キャンパス
259×388 cm

仰々しく天井に映し出された影。影があればその実体が気になる。影の出自を探すがよくわからない。そうしている間に手前のツノが気になる。いや、ツノが先に気になっていた筈だ。もう、どちらでも良い。

ケナガマンモス

日本では北海道にすんでいたゾウの仲間で、日本では2万年前に絶滅しました。長いキバは第二切歯、つまり前歯です。キバは骨ではなく、象牙質なのでツルツルしており、展示でも質感の違いを表現しています。キバの間にある大きな穴は、昔は一つ目巨人キュプロクスの「目」などと思われていたこともありますが、実際には鼻の孔です。

右上の天井には、ヤベオオツノジカの特徴的なツノがカゲとして見えます。



これまでをこれからの果てへ
2022
油彩、キャンパス
259×582 cm

化石が形成され、人がそれを発見し、あらゆる知恵と技術を駆使し、現在の様に展示されている。積み重なった途方もない時間の先に私は立ち会っている。私は恐らく化石にはならないが、化石は引き続き化石としてこれからもあり続けて欲しい。

新生代のほ乳類とマチカネワニ

左からアケボノゾウ、コウガゾウ、奥がアメリカンマストドン、手前の二足立ちがオオナマケモノ、ヤベオオツノジカ、一番右がナウマンゾウ、そして一番手前がマチカネワニです。恐竜の時代である中生代が終わったあとの「新生代」を代表する人気古生物のコーナーです。ゾウが多いのは、樽野学芸員の専門が反映しているのだと思います。学芸員の専門性や特色が、展示に反映されていくことで、標本には付加価値がつくので、より生き生きとした展示になるのでしょう。

田中秀介展 Shusuke Tanaka: "Painted" Natural History Museum

絵をくぐる

大阪市立自然史博物館

【主催】大阪市立自然史博物館

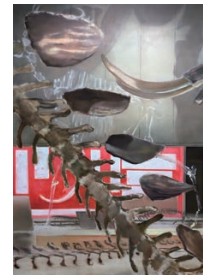
【助成】文化庁「ARTS for the future! 2」補助対象事業

【会場】大阪市立自然史博物館 本館1階 第2展示室

【会期】2022年10月25日（火）～12月11日（日）

- 展示室入口から時計回りに作品情報（タイトル、制作年、素材・技法、サイズ）を掲載しています。
- 作品はすべて作家蔵です。
- 作者の田中秀介さんによる作品についてのコメントを上段に、当館の田中嘉寛学芸員による描かれた資料についての解説を下段に記しています。
- 展示室の写真撮影、SNSへのアップはOKです。ぜひ以下のハッシュタグをつけて投稿してください。

#田中秀介展 #大阪市立自然史博物館 #絵をくぐる



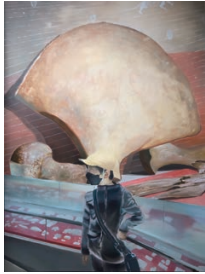
一端のせめぎ合い
2022
油彩、キャンパス
259×194 cm

一つのものを目で追うと、違うものが目に入る。解るように示されたものが幾重に重なり合い、それが何であったか解らなくなる。そもそも私は何も知らなかった。知る以前、知る以後、その間であたふたする。

ステゴサウルスから、新生代の展示

手前に描かれているのは、ステゴサウルスの尻尾です。ステゴサウルスは中生代ジュラ紀に生きていた植物食の恐竜で、全長9メートルありました。尻尾は背骨があつまってできていて、ふるとしなやかに、体のよこまで曲げることができたと考えられています。背中から尻尾にかけて、三角形の板が並んでいます。板の側面の溝は血管のあとで、放熱板として使われていたと考えられています。

ステゴサウルスの奥には、ヤベオオツノジカ、マチカネワニそして氷河時代の展示がみえます。



威勢寸借

2022
油彩、キャンバス
259×194 cm

威勢よく生きたいものだが、中々上手くいかないことも多く、威勢を保つのは難しい。彼は威勢が良い。しかし、たまたま。それで良い時もある。私も疲れたら、どえらいもの前に立ってうべだけでも威勢を保とう。

ザトウクジラの前肢、それからカツオクジラ

中央の大きなものが肩の骨、肩甲骨で、大阪市中央区からみつかったおよそ2000~5000年前のザトウクジラです。ザトウクジラは体長の1/3にもなる巨大なウデを持っています。イルカもクジラも尾ビレをつかって泳ぎますがザトウクジラはウデも使って泳ぐ珍しいクジラです。

作品中の人物の左肩のあたりにある化石は、大阪市の今里で見つかった、世界初にして唯一のカツオクジラの化石で貴重な標本です。手前のケースには、縄文時代の貝類が並んでいます。



取り持って一体

2022
油彩、キャンバス
259×194 cm

支える方は、支持するものの形に寄り添い、補完する。支持するものが無くなっても、その形を保ちながら自立し続けるだろう。

コウガゾウのウラガフ

これはキバだけで3メートルもある大きなコウガゾウの頭で、体全体の長さは7メートルあったでしょう。他のゾウのキバと違って、滑り台のように前下方にまっすぐ伸びています。展示を後ろから見ると、特注の白いフレームがピッタリと下アゴと頭に固定されていることがわかります。

絵の左側は正面からみたトリケラトプスで、左右につぶれて化石になりました。名前の由来になった3本(トリ)のツノ(ケラス)が描かれています。



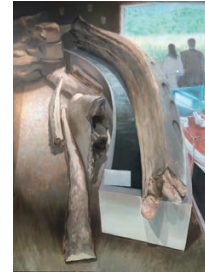
一端の星

2022
油彩、キャンバス
259×194 cm

私が住むここは星で、となると見渡すもの全てが星の一端。この石も同じく星の一端を担うが、その中にさらに星を見出す。ともすると夜空は石の表面。

火山岩

大阪と奈良にまたがる二上山から採集した火山岩です。二上山周辺ではおよそ千数百万年前に繰り返しおこった火山活動でできた火山岩があるので。描かれたのは、一部を切り取り磨いた火山岩の一種である溶結凝灰岩で、火砕流が固まったものです。さわれる展示になっています。断面には、火山灰や軽石、岩片などが混じり合っている様子が見えます。



二人の渚

2022
油彩、キャンバス
259×194 cm

仲睦まじい二人、見ていて和む。博物館デートですか。良いじゃないですか。この後何か良いものを食べに行ったりするんですか。ああ、私はもっと和みたい。そこの固い骨群を懸命に渚と見立て、二人を見続ける。

ナガスクジラの左下アゴ

大阪市の城東区の地下4~5メートルの深さからみつかった、縄文時代の巨大なナガスクジラの下アゴで、長さは4.4メートルもあります。上にあいている穴は、神経がでていた穴で、このクジラも「生きていた」ことを想像させます。左奥に積み上げた背骨も、同じく縄文時代のクジラです。当時の大阪平野には、生駒山のふもとまで河内湾という海が入り込んでいて、クジラ以外にも貝など海の生き物の化石が見つかります。



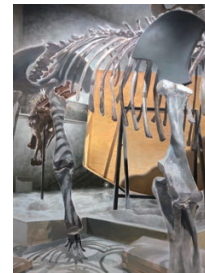
筆記体

2022
油彩、キャンバス
259×194 cm

私、結構色んなものに記してきたのですが、化石には未だ記した事がない。化石だろうと当然インクは乗るが、記して良いよと言われても躊躇する。思い切って晩飯に必要な具材などを記して、化石片手にスーパーに出向きたい。

埋もれているイルカの背骨

1954年に発見された古い標本で、縄文時代の地層である難波累層という地層から母岩ごと収集されました。イルカの背骨も母岩に少し包まれています。よくみると母岩には貝殻やウニの破片も含まれていて、当時の海を想像させてくれます。イルカの背骨のうえに、黒墨で産地情報として「梅田」と書かれています。朱墨のQ4822は大阪市立自然史博物館の標本番号です。背骨は前後に薄いので、高速で長距離を泳げるタイプのイルカの背骨でしょう。



やぐら

2022
油彩、キャンバス
259×194 cm

身を収められそうな空間があれば、そらくぐりたくなる。この展示室はその様な空間まみれである。しかし、そんなことをしてはいけない。一つお気に入りの入り口を描いて、思いとどまる。

アケボノゾウの体

アケボノゾウは200万~100万年前に北海道などをのぞく日本列島にすんでいた、肩の高さまで2メートルない小型のゾウです。当館の学芸員だった樽野博幸氏が明石海岸や三重県で見つかった化石を参考に組立てた、世界初のアケボノゾウの骨格復元です。化石は通常、バラバラになって、そうとう破損しますが、この標本はかなりそろって見つかった貴重なものです。肩の骨(肩甲骨)が黒いのは、化石が見つかっていないのでスタイロフォームで作ったためです。